

2024年度 白梅学園大学 子ども学部 発達臨床学科  
編入学者一般選抜 I 期

「発達・教育の心理学に関する基礎知識」

【解答例】

①共同注意

子どもが、他の人と同じように物体や人物に対して注意を向けている状態のことであり、おおよそ生後9か月ごろから見られ始め、1歳6か月までには成立するとされている。

他者がいる時に自分が見てほしいものを指さす「指さし行動」や、他者がある対象物を見てそれを自分も見る「視線追従」、自分がある対象に対する評価を他者の表情などを見ることで参考にする「社会的参照」などがある。

②洞察学習

ケーラーが、チンパンジーを用いた実験から、「状況を観察・理解することで問題解決に至り、学習が成立する」ことを提唱した。

ケーラーは、チンパンジーを檻の中に入れ、手の届かない離れた所にバナナを置くとチンパンジーは棒を使ってバナナを引き寄せることができることから発見された。

③カクテルパーティー効果

エドワード・コリン・チェリーによって提唱された選択的注意の代表的な現象の一つである。音楽や多くの話し声があるパーティ会場のような騒がしい場所でも、特定の人と会話ができることを指す。

④ハノイの塔課題

この課題の起源は数学的問題として考案されたが、現在では実行機能(遂行機能)を測定する神経心理学検査の1つとして用いられている。3本の柱の間で円盤を移し替えるパズルの一種で、必ず大きい円盤の上に小さい円盤を置く、1枚ずつ円盤を移動する、円盤はいずれかの柱に必ず入るなどのルールをもとに、提示された初期状態から最終状態を目指すものである。課題の難易度は、円盤の枚数に応じて変更することが可能である。問題解決能力やプランニング能力を必要とし、遂行機能障害の評価やリハビリテーションに用いられることもある。

⑤合理的配慮の提供

障害者差別解消法に基づき、障害者本人から意思が表明されたときに、行政機関等や事業者が、過度な負担が生じない範囲で、必要かつ合理的な対応を行うことをいう

#### ⑥いじめの四層構造

森田洋司が1986年に提唱した概念であり、「被害者(いじめられっ子)」と「加害者(いじめっ子)」のほかに、いじめをはやし立てる「観衆」、その周囲で無関心を装う「傍観者」の4つが存在する。

#### ⑦注意欠如・多動症の診断基準

アメリカ精神医学会によるDSM-5(精神障害の診断・統計マニュアル第5版)に基づいて診断がなされる。診断基準は「①不注意か多動性・衝動性、または両方の症状が6か月以上、持続してみられる」「②不注意、多動性・衝動性の症状が12歳前から存在している」「③不注意、多動性・衝動性の症状が2つ以上の状況(家庭と学校など)で存在する」「④症状によって、社会的、学業的、職業的な機能に明らかな支障がある」「⑤症状は、他の精神疾患(統合失調症、気分障害など)でうまく説明できない」である。

#### ⑧標準偏差

平均値に基づいて算出される値であり、散らばりの度合いを示す基本統計量1つである。分散の平方根(ルート)によって求められ、SD(Standard Deviation)と表記される。データが正規分布に従う場合は、平均値から±1SDにデータ全体の68%が含まれ、平均値から±2SDにデータ全体の95%が含まれる。